様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ２２０２８

研究課題名（和文）台湾の視覚障害者と脱植民地化：政策と社会的表象

研究課題名（英文）Visually Impaired People in Taiwan in the Process of Decolonization: Focusing on Policy and Social Representation

研究代表者
深串　徹（Fukakushi, Toru）

島根県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：９０８８１６５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本からの脱植民地化前後で台湾の視覚障害者の境遇に生じた変化を検討し、以下の二点が判明した。（一）中華民国による接収後、日本点字に代えて注音符号点字が導入されるなど脱日本化が進められる一方で、職業教育としては日本統治時代に導入された按摩が引き続き重視された。（二）中華民国時期になっても戦時体制が継続したことにより、視覚障害者は献金や軍人への慰問など、日本統治時代と同じような方法で戦争に関与した。また、国家元首の仁愛や恩徳を証明する存在として、あるいはハンディキャップを負いながらも国策に貢献しようとする愛国的な国民として、宣伝に用いられることもあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的・社会的意義は、従来もっぱら健常者の回想や記録をもとに再構成されていた日本統治時代から中華民国時代への移行過程が、視覚障害者にとってどのような経験であったかを部分的に明らかにし、台湾の脱植民地化研究に新たな視角を提示したことである。また、視覚障害者と戦争との関わり方など、二つの時代に存在した連続性についても新しい事実を発掘することに成功した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the changes that occurred in the circumstances of visually impaired people in Taiwan before and after decolonization from Japan. The research revealed the following facts. (1) After the ROC seizure, the de-Japanization of education was promoted. In this process, Japanese braille, tenji, was replaced by Chinese braille. However, as for vocational education, emphasis continued to be placed on massage which was introduced during the colonial period. (2) As the wartime regime continued in the Republic of China period, the visually impaired were involved in the war effort in the same manner as under Japanese colonial rule, such as donating money and providing comfort to military personnel. They were also used in propaganda as proof of the benevolence and beneficence of the head of state, or as patriotic citizens who were willing to contribute to national policy despite their handicaps.

研究分野：地域研究

キーワード：台湾　脱植民地化　視覚障害者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

研究代表者は、大学で研究・教育を行うかたわら、2016 年から全国高等学校長協会入試点訳事業部にて視覚障害教育にかかわる仕事に従事してきた。その関係から盲学校の歴史に関心を抱くようになり、専門とする台湾史において視覚障害者をめぐる諸問題がどのように扱われているかを調べてきた。

日本統治時代から中華民国時代への移行期において、台湾の住民が直面した大きな問題が、国語（北京語）の導入であったことはよく知られている。植民地統治が終了したにもかかわらず、国語を使用できないという理由により政治的・社会的に枢要な地位から排斥されたことは、日本語教育を受け、家庭では台湾語などを使用していた台湾人エリート層に大きな失望感を与えたのである。それでは、日本統治時代に日本式点字を習っていた視覚障害学生は、どのように統治の移行期を迎えたのであろうかという疑問が浮上した。

また、呂紹理『展示台湾：権力、空間與殖民統治的形象表述』（麥田出版、2011 年）によれば、1903 年に大阪で内国勧業博覧会が開催された際、台湾総督府は台湾の人々を内地に招待し、日本の国力の充実ぶりを印象づけようとしたという。その際の参観先の一つが東京にあった盲唖学校（当時、視覚障害者と聴覚障害者は同じ学校で教育されていた）であり、台湾からの参加者も強い印象を受けたことが記録されている。盲唖学校は、文明の進歩を象徴する宣伝材料としても使用されていたのである。このように、視覚障害者に対する施策を政治宣伝として使用することは、戦後の中華民国時期においても行われていたのだろうか。いたとすれば、その内容は日本統治時代とどのような異同があったのだろうか。

以上のような問題関心から、日本からの脱植民地化が台湾の視覚障害者のおかれた状況にどのような変化をもたらしたかを、政策と社会的表象の両面から検討しようという、本研究の着想に至った。

## ２．研究の目的

本研究は、以下の二つの視点から、政権の移行期における台湾の視覚障害者の社会的状況について分析を行う。第一に、植民地統治終了の前後で、視覚障害教育、視覚障害者の就業パターンにはどのような変化が生じたのか。第二に、メディア等において、視覚障害者はどのように社会的に表象され、その表象は植民地統治の終了前後でどのように変化したかである。このような検討を通じて、先行研究の少ない台湾の視覚障害者政策の歴史的な背景を整理するとともに、視覚障害者の観点から脱植民地化の一断面を明らかにするのが本研究の目的である。

## ３．研究の方法

本研究は、日本統治時代と中華民国時代の二つの時代を対象に、比較考察を行った。

日本統治時代については、阿部洋ほか編『日本植民地教育政策史料集成（台湾編）全 10 集・別 2 集　全 119 巻』（龍渓書舎、2009 年）、台湾教育会編『旧植民地教育史資料 4　台湾教育沿革誌』（青史社、1982 年）、『台湾日日新報』などの資料により、視覚障害者の教育と就業、ならびにその社会的地位について分析を行った。また、戦時中の日本内地における盲学校の状況を理解するべく、2022 年度には京都府立盲学校で資料収集を行った。

中華民国時代については、世界盲人百科事典編集委員会編『世界盲人百科事典』（日本図書センター、2004 年）、顧定倩・朴永馨・劉艷虹編『中国特殊教育史資料選 上～下巻』（北京：北京師範大学出版社、2010 年）、国史館中華民国史社会志編纂委員会編『中華民国社会志（初稿）下冊』（新店：国史館、1998-1999 年）、『中央日報』などの資料のほか、盲学校関係者の回想録を参照した。本来は、台湾にて国家発展委員会档案管理局所蔵の文書を調査することも計画していたが、新型コロナウイルスによる渡航制限により、期間中に実施することができなかった。

## ４．研究成果

先行研究の整理、および各種資料の分析により明らかになったことは、以下のとおりである。

第一に、視覚障害者への教育では、中国語による教育や注音符号点字の導入など一定の脱日本化が行われ、視覚障害者は新たな言語と文字の習得が必要とされた。だが、職業教育では日本統治時代に導入された按摩が引き続き行われ、就業先としても重要な位置を占め続けるなど、二つの時代には連続性も見られた。中国大陸では視覚障害者による按摩が一般的ではなかったにもかかわらず、こうした連続性が生じた背景としては、按摩業が台湾社会で定着していたこと、戦前の盲学校関係者を中心に設立された「台湾省盲人福利協会」によるロビイングが行われたことなどが考えられる。視覚障害者による運動は、台湾省議会や立法院の中に支持者を獲得することに成功しており、彼らの社会的発言権は日本統治時代に比べ向上したと言える。

第二に、視覚障害者は中華民国時代に入っても、日本統治時代と同様に集団で軍に献金したり、按摩による軍人への慰問を行ったりするなど、戦争と無関係ではいられなかった。また、国家元首の仁愛や恩徳を証明する存在として、あるいはハンディキャップを負いながらも国策に貢献しようとする愛国的な国民として、宣伝に用いられることもあった。このような連続性は、植民地統治が終了したにもかかわらず、戦後も引き続き戦時体制が布かれたことと密接に関係していた。

以上の成果の一部は、深串徹（2022）として刊行した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>深串徹 | ４．巻<br>24 |
| ２．論文標題<br>台湾における戦争と視覚障害者(1937~1991年) | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>日本台湾学会報 | ６．最初と最後の頁<br>145 165 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|